人かの級友たちとだらだら坂を歩いて新市街へ向かった。そのとき、途中の支那家屋のあちこちに青天白日旗がひるがえっていることに私たちは気がついた。その当時としては信じ難いこの光景を見、私たちは日本の敗戦を容認せざるを得なかった。彼等がこの日を予期し、そして待ち続けていたことは明かであった。9月4日、私は旅順高校の友人たちと大連へ行った。そしてダイヤも乱れ、行き先もあてにならぬ汽車に乗り、どうにかこうにか奉天の実家に帰ることができた。翌年、夏の盛りに引き揚げ、四国の父の実家に住むことになった。翌春、転入学試験に運よく通り、四国の高等学校へ、満州医大予科のK君と二人で転入学した。全くの幸運だったと思う。秋には外地の学校や軍の学校から転入生がかなりの数で仲間入りし、その中に旅順工大予科生の佐々木恭輔君が居り、同じ寮に住むことになって心強かった。ここで戦後自由になった高等学校という環境に身を置き、個性豊かな先生方や友人たちに恵まれ、興亜寮とはまたひと味ちがう寮生活を送った。

本人の意思と無関係に出逢う先生、先輩、友人、そして偶然の運によっておかれる環境、そしてドラスティックに変換する歴史の流れ、これらすべてが一個人の生活やその将来に避け難いインパクトを与える。とくに昭和ひとけた前半の、旧興亜寮生を含む外地にいた我々は、特異な運命に弄ばれながらも、人生を精一杯に生きた旧制の悼尾を飾る世代といえるように思う。

長年、研究と教育に時を過ごし、気がつけば還暦を過ぎた今、「旅順」の淡い記憶は我が人生における運命において特異な位置を占めていることに気がつく。(旅順工科大学悼尾会「悼尾を飾る－最後の旅順工科大学予科生の記録」1990)

「ふるさとは遠きにありて想うもの」

1.「男は辛いよ」

先日、「寅さん」の山田洋次監督の話をテレビで偶然きいた。山田監督は大連から引き揚げたそうで、私たち同様、故郷喪失の人である。“俺には妹が住んでいるふるさとがあるから、何時でも帰れる”という寅さんのせりふは、ふるさとのない山田監督が自分に言えないことを寅さんに言ってもらう、といういわば自分の願望である、という話しであった。なるほど、寅さんと山田監督のあのペーソスは私たちに共感を与えるはずだ、と私は思った。私自身、この大阪に住んで半世紀近くなるが、いまだに「大阪に住むことの必然性」を実感しない。今だに大阪は私にとって偶然住んでいるところ、という気持ちが抜けない。長く満州—私の場合は奉天、大連、旅順—という「ふるさと」を想い続けてきた。しかし、今の私は「ふるさとは遠きにありて想うもの」に徹しようと努めている。

2. ふるさと帰り

1978年秋、私は待望のふるさと帰りの機会を得た。毛沢東の死と四人組の逮捕によって文化大革命が終ってからあまり時が経っていない頃であった。実は北京に着くまで奉天に行けるかどうか確かでなかった。中国科学院の招きで訪中の話しがあったとき、私はふるさとの奉天に行けるのなら北京に行く、と返事をした。先方は、“そのように努力しますからぜひ北京に来てください”、と言ってきた。北京空港に着いたとき、出迎えの科学院の人が“ご希望どおり奉天を訪問して下さい。遼寧飯店を予約してあります”と伝えてくれた。私の心は躍り、夜も眠れ

ぬほど興奮して北京での日程が終るのを一日千秋の思いで待った。

遼寧飯店、つまり旧ヤマトホテルに着いたのは暗くなってからであった。私は明日になるのが待てず、部屋に荷物を置くなりホテルを飛び出して富士町を忠霊塔のほうへ暗い道を急いだ。わが家のあたりを確かめ、千代田通りを駅の方へ歩き、春日町を通り、遅くホテルへ戻った。「あまり変わっていないようだな」と一応満足し、その夜は眠りに就いた。

翌日、形だけの訪問、つまり農科大学訪問を終え、母校である旧千代田小学校（現英才学校）を公式訪問した。思わぬ歓迎を受け、いい気分で解放してもらい、わが家の近辺をそぞろ歩いた。その頃から私の「懐かしい」という気持ちは「悲哀」とある種の「憤り」に変わった。それは、「私たちのふるさとをこんなに荒してしまって」というもので、わが家の建物は内部が幾つかに仕切られ、荒れ放題で住人は土足で出入りしていた。町は汚れ放題、並木は伸び放題、これが長年想い続けたわが故郷か、と、ここを訪れたことに後悔に近い気持ちを持つほどであった。それでも飛行場から奉天を去るときは「再見」と町に手を振って別れを告げた。

3. 二度目のふるさと帰り

5年後の1983年、今度は上海の科学院から招待の話しが来た。懲りもせず私はもう一度ふるさとを訪れたいと想い、また条件を出した。奉天のほか、大連と旅順を訪問したいと。自由化がこの5年で進んだのか、今回は先方ははじめから私の希望を快く受け入れ、“ご同伴でおいで下さい。歓迎します。”と返事が来た。しかも、中国科学院の「旅順訪問特別許可証」付であった。上海から前回と同じく奉天の東陵飛行場に着陸、今回は市の中心に近い旧奉ビルホテルが宿にあてられた。千代田通りの旧宅を訪れ、旧応接間でお茶を御馳走になったが、わが家の変り果てた姿に再び悲哀を感じた。小学校を訪れて子供のころの思い出に耽り、奉天二中へ行った。母校は軍の施設になっており、中には入れず、校舎の写真を撮ろうとすると、兵士をいれないように言われた（実は兵士もろとも撮ったが）。家内の母校、旧長沼高女を探しに車で回ってくれたが、ついにその場所を確認できなかった。

こうして2回も奉天に行った私は、「ふるさとはもはや消え失せた」という再度の悲哀を胸に感じながらここを去り、連京線、軟席の客となって大連へ向かった。途中、熊岳城を通り、望小山などを懐かしく眺めて昔と変わらぬ大連駅に到着、旧ヤマトホテルにチェックインした。翌日、幼時を過ごした桃源台に行き、町をあちこち歩いた。奉天と違い、大連は大広場、大連病院、旧満鉄本社、日本人住宅など、昔の面影を残し、アカシア並木の美しい町並みは当時のままのように見えた。“大連がふるさとの人はいいなあ”と。

科学院の人から思いがけない悪い報せが来た。“先生の旅順訪問には解放軍の許可が出ませんでした”という。私はこの予想もしない知らせに、失望を通り越し、憤怒で血圧が急上昇したような気がした。上海の科学院に電話をし、不許可の理由を尋ねたところ、“申し訳ない”の一点張りでどうにもならない。私は“科学院より軍隊のほうが優先するのか。約束を破るようなことを君子の国がするのか”と怒りを科学院の教授にぶっつけた。これでは何のために2度目の訪中をしたのかわからない。大体、中国の場合、招待といっても、国内の滞在、交通費用は科学院が負担するが、日本と中国の間の飛行機賃はこちら負担であるから（旧共産圏はすべて同様）、よほど利点が無ければ、すなわち旅順に行けないことがわかっていれば招待など受けなか

ったのに、と私の怒りは納まらなかった。こうして、とうとう懐かしい旅順を訪れることができず、最終予定の北京へと大連を飛び立った。

北京に着くと、予定外だが、明後日、夜行列車に乗って泰山の農科大学へ行き、講義をあと2回してくれ、という要請があった。私は怒りを抑え切れず、“そんな約束はなかった。君たちと違い私は約束は守り、ここ北京では講議はする。しかし約束のない泰山には行かない。君らの違約は不愉快だから今夕の飛行機で大阪に帰る。早く切符の手配をしろ”と言った。私の短気のせいで、故宮も万里の長城も見ないで、何のために北京に来たかわからない、と家内はぼやいた。

4. 旅順の航空写真

こういうわけで、私はふるさと奉天はもう亡いものと思うよう努めている。しかし行き損なった旅順には未練があり、最近「旅順訪問解禁」などの案内が来ると、出かけたい気持ちが動いてしょうがない。幼時にしばしば遊び、終戦時にいた美しい旅順、と思うだけで心が踊る。行けば幻滅の悲哀を感ずるかも知れないとは思うものの、やはり確かめたいという気持ちは抑え難い。

先日、やはり終戦時、旅順にいた北原朗君が写真を送ってくれた。それは、スチューワデスをしている彼のお嬢さんが空から撮った旅順の写真3葉であった。旅順湾西港、東港、黄金台、この辺りが白玉山か、新市街か、二百三高地はこの辺りか、学校はこの辺りかなどと、これらの写真を眺めるといろいろな記憶が蘇る。子供の頃、夏になると旅順に一家で遊び、聖地会館に泊まって黄金台海岸で海に遊んだこと、西港でカニやサヨリを釣ったこと、そして終戦前後、寮で毎日食べさせられた太刀魚とフキのこと、と思い出は尽きない。“やはり旅順に行かなくてはいかんな、それともやめようか”と心が迷う。

5. ふるさとは遠きにありて想うもの—日本にふるさとは無いのだろうか

やはり、私たちのふるさとは現実には喪失したものと理解すべきであろう。心の中に生きていればよい。それは当時の友に会い、語ることのなかに生きている。そしてその場所は「遠きにありて想う」のがもっともふるさとらしいのではないか。ただし、伊東（石谷）良太君や山之口公君のように、父君を満州の地に亡くし、亡くなられた場所も確認できている場合、私などとは違った感慨と絆を、ふるさとという以上にあの地にもっておられるであろう。

祖国日本に私たちのふるさとは無いのだろうか、盆暮れに帰るところもなく、大阪はやはり第二のふるさとであろうか、と「帰巣本能」は私に問いかける。引き揚げののち、3年間学び、大学卒業後新制大学に変わった母校に助手として3年半勤めた松山に私はある種の愛着をもっている。奉天、大連、旅順とあまりにも違う、おそらく極めて日本的な小都市での合計6年半の暮らしは、引き揚げ後間もない若い時であったためか、今は懐かしさが心に芽生えてきている。当時、奉天、新京、大連、旅順などから引き揚げて転入した級友たちと食糧不足の生活を送りながら満州の話しをするのが大きな慰めであった。こうして、満州帰りの友人たちと語り合うことによってふるさと満州と松山という日本の土地が結びついたように思う。

私の愛読する司馬遼太郎「坂の上の雲」は、時代は違うが、満州と松山を繋ぎ、何となく私の望郷の乾きを満たしてくれるような気がする。今も私は通勤電車の中で文庫版の「坂の上の

雲」全8巻を長年繰り返し読み、満州―松山に思いを馳せている。

『追記』この後、父君の戦死の地を訪れ、最近無くなった母君の分骨を父君の近くに埋めるために満州を訪れた伊東良太君は、そのあと訪れた奉天、大連、旅順で撮った多くの写真を下さった。その中には、奉天二中、旧宅あと、旅順工大、旅順高校、日露戦跡などがある。(「砂丘」1998)

「一外地転入生の松高生活」

私の松高生活は縦糸が理科三組の教室における生活だとすると、横糸は寮と下宿および音楽部の生活であったといえる。いずれも恩師と先輩、友人がその中心であって、三年間の松高生活が、いろいろな意味で現在につながっている。私の松高生活が友人たちのそれと別の意味をもっていたとすれば、それは私が満州からの引き揚げ転入生だったという事実によるところが大きい。一年の時のクラス担任だった西洋史の村瀬興雄先生には二年生以後私の指導教官としてお世話になった。一年の時の指導教官、植物学の小野記彦先生は名古屋大学に移られ、後任に仙台から来られた宮本義男先生には私の一生を決定する影響を受けた（この点については別に記したので省略する)。これら三先生、それに大学卒業後も論文のドイツ語でお世話になった三好助三郎先生とは現在でもご厚誼を頂く栄を得ている。理科一、三、四組の級友であった石川登、岩瀬正臣、中田高義、真鍋礼三、薬師寺春雄、坂和愛幸らの諸君とはいまでも行き来が続いている。一年の時の寮生活で苦楽を共にした文乙の根矢学、理科三組の河野正の諸君、一級上文乙の松本恭輔さんらは忘れ難い友人たちである。根矢君は京大法学部、私は理学部へ進んだが、京大生時代、そしてその後実社会へ出て長年たった今も高校生気分でつき合ってもらっている。音楽部では毎年秋の定期演奏会でOBや部員、それに応援演奏のお嬢さんたちとハイドン、モーツァルト、シュトラウスなどを楽しく演奏した思い出がある。以下、横糸である寮、下宿の生活を中心に一引き揚げ転入生の松高生活を振り返ってみたい。

1. 転入学試験

焼け残りの松高で転入学試験を受けたのは昭和22年2月のある寒い日であった。前日、丸亀から予讃線に乗って松山に着き、道後に一泊して翌朝、持田へ行って驚いた。講堂と一部の教室を残して何もない松高を見、もし入ったらどこで授業を受けるのかといぶかった。

転入学試験の出来は散々で、戦時中の中学時代の勤労動員の明け暮れ、終戦後の混乱と引き揚げなど、不勉強の結果とはいえ、まずは不合格と覚悟した。一教室に、いろいろな外地学校の制服を着た受験生3－40名が学年別の転入学試験を受けた。試験課目には数学、英語、ドイツ語などがあったが、最後は作文（自由題）であった。引き揚げ後、外地の高校、大学予科在籍の私たちに対し文部省から通知があって、引き揚げ学生の収容可能数は各校とも少数であるから、できるだけ多くの高校で転入学試験を受けよ、とのことであった。私はどうせ不合格だろうし、このさい率直に訴えておこうと思って次のように書いた。「引き揚げ者は上陸地（私の場合は舞鶴）で一人千円しか交換してもらえず、以来お金に困っている。汽車に乗るにも切符を買うのが大変で、しかも超満員の汽車に乗って空腹をかかえて旅をするのは困難である。また宿賃も大変な負担である。だから、なるべく多くの高校を受験せよというのは引き揚げ学生に